

## レコード蒐集家百景

レコードコレクターはある意味で特殊な人々です。なぜなら今のメディアの主流はCDであり、レコード蒐集はごく限られた人々、いわばマイノリティの趣味であるからです。今回は、そんなコレクターの面々を(大雑把にはありますが)俯瞰してみることにしましょう。

何はさておき、この分野最大の勢力は、大指揮者フルトヴェングラーのコレクターを描いて他に考えられませんが。レコードコレクターと呼ばれる人々の中で、フルトヴェングラーを一度も聴いたことが無い、あるいは全く興味が無い、という人が果たしているでしょうか。「フルトヴェングラーは偉大な指揮者のうちの一人である」と斜に構えている私でさえも、ひとたびその演奏を聴けば、その素晴らしさに圧倒されてしまいます。

フルトヴェングラーを典型として、レコードコレクターに多いのが演奏家のコレクターです。アッシュケナーやプレトニョフなど今も活躍する演奏家はもちろんのことですが、古きを訪ねるレコードならではというところで、カザルス、クライスラー、ティボー、コルトーなどをはじめ、ハスキル、リパッティ、リヒテルなど。またもう少しマイナーなところでは、ウィーン・フィルのヴァイオリニストであったバリリや、スイスのペーター・リバルなど、マイナーな演奏家を追っているコレクターは数限りなく存在します。

また、ドイツの指揮者、ルドルフ・ケンペのある大コレクターは、コレクションが嵩じて、ついには『指揮者ケンペ』という本まで上梓されています。

本といえば、以前にも紹介した『ロシアピアノ』の著者、佐藤泰一氏は、ロシアピアノという枠のコレクターではありますが、実のところショパンのレコードを追い続けておられるコレクターでもあります。20年ほど前に発売された氏の著作『ショパン・ディスコロジー』こそ氏のコレクションの原点であろうかと思えます。演奏家コレクターから派生してもう少し広いコレクションを目指す方々がいます。中でも古今東西のヴァイオリニストをどこまでも追い続けているコレクターは、少なくありません。それは、ジェームス・クレイトンというカナダのコレクター兼司書が『Discopaedia of the Violin』という、レコードの発明から発売された総てのヴァイオリンのレコードを、ほぼ完璧に網羅したディスクグラフィを出版した影響が少なくないのではと思います。

また、前回触れた弦楽四重奏曲も、そのコレクターは少数ながら存在します。これも、幸松肇氏という日本における弦楽四重奏の生き字引のような方がおられる影響が少なくないと思われます。手前味噌ではありますが、氏が以前連載されていた記事を纏めた『レコードによる弦楽四重奏曲の歴史』を私が出版するという栄に浴することもできました。



コレクターの「聖典」? フルトヴェングラー「バイロイトの第九」

さて、もう一つの勢力として、曲コレクターという存在があります。CDでは、ショスタコーヴィチや北欧マイナー作曲家が流行なのだそうですが、レコードの世界では、まるで時が止まったようにモーツァルトやバッハのコレクターが主流となっています。前記佐藤氏のショパンなど、マイナー中のマイナーではないでしょうか。この曲コレクションが先鋭化すると、ベートーヴェンの「英雄」や「第九」交響曲のみのコレクター、あるいは、バッハのシャコンヌやゴルトベルク変奏曲、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲のみを集めるというようなコレクターを生み出すことになります。

他にも、ハイファイ録音を中心に集めるオーディオファイル・コレクターという一派があり、イギリスDeccaを始めとする初期ステレオ録音の初版盤がその主な対象となっています。故長岡鉄男氏は、この分野で今なお最も影響力ある評論家であり、「長岡教徒」なる言葉まであるほどです。

変り種としては、オペラ、それもテナーだけを集めるコレクターがおられるのですが、このお方、まさにテナーのように浪々と止め処なく喋り、興が乗ると自ら歌いだす、一部では有名な方です。

このようなことを書いていると、以前ある人が、「フルトヴェングラーが最高なのだから皆それを聴いていけば良いのに」と言っていた人に対して「全ての人々がフルトヴェングラーしか聴かなくなったらコレクターが居なくなってしまうじゃないか」と反論していたことを思い出します。

いずれにせよ、これだけ様々な人々を惹きつけ、コレクターならしめる、音楽の力というものに、改めて驚きと畏敬の念を感じずにはいられません。